

授業概要

人間がもっとも知りたいこと。それは人間のことです。そして、自分のことは知っている（あるいは知っているつもりになる）から、興味は自ずと他者へと向かうのです。

けれど、そもそも、他者にはなれないのだから、他者を完璧に理解するなんて、無茶な話です。それでも、人間は人間のことを知りたがるのです。それだけ、他者を理解することは人間の根本的な欲求なのです。

人間を、そして他者を知りたくて、人類学という研究分野はおおいに隆盛し、現在にいたっています。その守備範囲は多岐に及びますが、本講義では、言語や社会といった文化的側面に照射する文化人類学を扱いたいと思います。融通無碍で複雑怪奇な人間社会に挑む文化人類学は、ともすれば、難解な理論・概念が求められます。でも、その説明は最低限に抑えたいと思います。より具体的な研究実践例の確認に力点を置くことで、親しみやすい文化人類学を提示したいのです。だから、受講生のみなさんには気軽に、でも積極的に授業に参加し、しっかりと人間に向き合ってほしいです。

授業計画

第1回	導入：ある研究者の履歴
第2回	文化人類学ノート①：文化人類学の歴史
第3回	文化人類学ノート②：ムギとイネの人類学
第4回	文化人類学ノート③：風土論
第5回	文化人類学ノート④：婚姻・家族・親族
第6回	インド横断ひとりぼっちの旅
第7回	文化人類学の理論①：贈与論と機能論
第8回	文化人類学の理論②：カーストとトーテム
第9回	文化人類学の理論③：構造主義
第10回	文化人類学の理論④：熱い社会、冷たい社会
第11回	呪術の人類学①：宗教人類学という地平
第12回	呪術の人類学②：陶工、医者になる。
第13回	呪術の人類学③：パゴールとコピラージ
第14回	草木虫魚の人類学
第15回	総括Ⅰ：文明人類学の提唱
第16回	総括Ⅱ：理解度の確認

到達目標

- (1) さまざまな人間文化の多様性を知り、国際化する社会に貢献できる力を培う。
- (2) 文化人類学の基本的な考え方に触れ、複雑な現代社会を理解する力を向上させる。
- (3) 文化の多様性を切り捨てることなく、普遍性を追究する思考を涵養する。

履修上の注意

- (1) 予備知識は必要ありませんが、主体的・積極的な授業参加を希望します。少なくとも、講義中は、貪欲に知識を吸収する意欲だけは持っていてほしい。
- (2) 欠席・遅刻・早退については、理由（就職活動、教育実習など）を鑑み、これを認めることがあります。

予習復習

予習・復習の必要はありません。

評価方法

理解度の確認 80%、平常点評価 20%（講義中の発言など）

テキスト

- (1) テキストは指定しません。関連資料については、適宜、配布します。
- (2) 文化人類学の著作は多岐に及びますが、入門書として、以下を紹介します。
祖父江孝男『文化人類学入門』（中公新書）。